中国・岭后（リンホウ）村ワークキャンプ報告

2002年11月
FIWC関東

もくじ

ワーク「厠所工作」 2
村人との関係 4
集合住宅建設に関するアンケート 6
中国的学生 8
反省会 9
対談 10
中国キャンプ参加者募集（2003年2月） 12
リンホウの人々 2～7（下段）

第1回中国リンホウ村ワークキャンプ

キャンプ地：　広東省潮州市潮安県古巷鎮リンホウ村（ハンセン病療養所）
日程：　2002年10月31日～11月18日
中国側参加者：（韓山師範学院3年）朱佳栄（マーク・♂）、呉欧宏（ジェイソン・♂）、徐中茂（ハマー・♂）、蔡潔珊（ジル・♀）、フェン＝リーファン（ウィンディー・♀）、蘇敏（スカイ・♀）、パン＝シュウカン（デリク・♂）、陳秀華（アマンダ・♀）、リトル（♀）、シエ＝シュウチュン（シャロン・♀）
日本側参加者：島倉陽子（♀）、西尾雄志（♂）、原田燎太郎（♂）、藤澤眞人（♂）、枡田香織（♀）、松村泉（♀）

我喜歓岭后

第1回中国ワーク[注1]キャンプは11月1日から17日、広東省潮州市潮安県古巷鎮リンホウ村（ハンセン病療養所）にて開催され、中国人学生も参加してトイレを建設した。今回のワークキャンプでは、スタッフが立てた3つの目標―①村人との良い関係を築くこと、②ワーク（水洗トイレ・断熱材）を完成させること、③その過程に中国人学生を巻き込むこと―を達成し、次回以降のワークキャンプ（集会所・倉庫・台所建設キャンプ（2月）、家屋建替え・水道設置キャンプ（8月））の土台をつくることができた。

隔離の傷跡

「スラム―犯罪＝リンホウ」（西尾）という下見時の印象を忘れるほど、村人は皆とても陽気で、仲良くなることができた。しかし、ハンセン[注2]病の隔離による傷跡―差別、孤独、高齢、貧困、そして死―を意識させられることもあった。

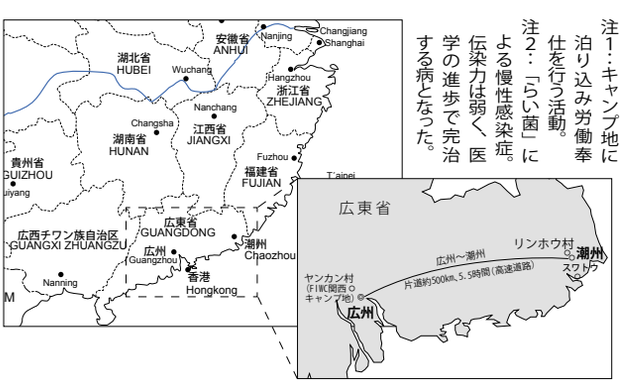
このワーク、役に立つのか？

最終日の前日には、村人全員に対してアンケートを実施し、「コ」の字型集合住宅の建設計画（新家屋・集会所・倉庫・共同台所・水道）の必要性に関する再調査をした。これにより、ワーク計画の意義をあらためて確認することができた。再調査をした理由は、約3週間村で生活し、村人の生活を目の当たりにするうち、「コ」の字計画によって彼らの生活は激変し、身体が不自由で高齢な村人は新しい生活環境に適応できないのではないかという疑問をもったことにある。

中国の学生が変わった！

この聴き取り調査を村人1人1人に行ったことによるもう1つの大きな収穫は、地元・潮州の韓山師範学院の学生がハンセン病問題を自分たちの問題として考えるようになったことだ。はじめは主に通訳係として村人の話をにのめり込み、じっくりと村人の要望を聴きはじめ、通訳という任務を忘れることさえあった。この中国の学生たちは、FIWCの帰国後も村での活動をつづけることになっている。

注1：キャンプ地に泊り込み労働奉仕を行う活動。
注2：「らい菌」による慢性感染症。伝染力は弱く、医学の進歩で完治する病となった。



ワーク「厠所工作」

汗とセメントにまみれ、蚊に食われながら、村人、建設業者、中国側・日本側キャンパーが身体を動かす。いつしか「ハンセン病快復者」という認識は、「リンホウ村の曽さん」「松立（ションリー）さん」にかわっていた。村に寝泊りし、村人といっしょに働く「ワークキャンプ」ならではの醍醐味だ。ただ箱をつくるだけなら、資金も技術もある大きなNGOの方がきれいに迅速に建てるだろう。

トイレと断熱材

今回のワークは、水洗トイレの建設と断熱材の設置（長屋Aの屋根へ、P6参照）。このトイレは、村人13名全員が住める集合住宅（8月建設予定）で使われる。作業の進め方は、建設業者を4人雇い、その仕事を手伝うというかたちで、レンガ運び・セメントこね・穴掘りなどをした。

ゴリゴリ働く中国人学生3人。眞人（右上）は休憩中

トイレの完成は、ワーク開始後11日目の11月13日だった。予定では完成を見ずに帰国するはずだったが、好天が続いたうえに、そのスケジュールはキャンパーの働きを度外視して立てられたものだったようで、予定より早く完成させることができた。

建設業者の下っ端。とってもお茶目

▽1日目（11月3日）基礎づくり、レンガ積み

初日の課題は、建設業者との関係づくり。朱佳栄（マーク）の通訳があるも、業者に「お客さん」扱いされ、穴掘りさえさせてもらえない。結局、午前中はワークに絡めずにおわった。

午後になると業者の人数の関係上、キャンパーにも仕事がまわってきた。言葉がわからない分、業者が望んでいることを予測し、彼らの期待に添う働きを心がけると、信頼関係が生まれはじめた。業者がレンガを積みやすいよう並べ、モルタルが入ったバケツが空になるや否や新しいモルタルを渡す。「棟梁」（建設業者のあだ名。P7参照）のニヤリと笑った口からは「好（ハオ）！（いいね）」が飛び出す。3時間ほどでレンガは1m積み上げられた。

▽2日目（11月4日）レンガ積み

「どーよ、調子は？」

村人は、珍しいガイジンの様子をニコニコしながら見にくる。昨日に引き続き、曽さんがタバコを吸いながらやってきた。どんどんレンガを積んでいく「棟梁」や「メキシコ」としゃべりまくる。大きな笑い声に交じって、「ジップン、ジップン（日本、日本）」と聞こえる。「何でこいつらは一緒に働いてるんだ？」とでも言っているのか。

休憩も村人といっしょ。マークがキャンパーの輪の中で、スープにいれる野菜の茎と根をちぎっていると、曽さんとションリーも加わり、おしゃべりは延々とつづく。隔離されてきた数十年分を、一気に吐き出すかのようだ。

休憩中、マーク（右下）としゃべりまくる村人の曽さん（中央奥）

▽3日目（11月5日）レンガ積み終了、屋根づくり

早い。3日目の15時ごろ、レンガは積み上がってしまった。次は屋根にセメントを流し込む。足場を組んで木枠と鉄筋を屋根に張り巡らし、バケツリレーでセメントが屋根の上に運ばれていく。「童顔」が中庭でセメントをこね、バケツにガシガシ入れる。それをキャンパーが足場の下にいる郭さんに渡す。

「フィッ！」

気合いを込めて、郭さんはバケツ―決して重くはない―を「リーダー」が立っている足場に持ち上げる。受け取った「リーダー」は屋根の上にいる「メキシコ」にリレーし、屋根の上にバケツはあけられる。

▽4日目（11月6日）コエダメ堀り

（内側をセメントとレンガで固める）

「棟梁」の中華料理はワンパターン。だが、うまい。彼は毎日10時半ごろになると、孫叔叔（シュウシュウ）にガスを借りて昼食をつくる。そのお礼なのだろうか、業者の4人はシュウシュウといっしょに昼ごはんを食べる。長屋Bの村長宅側の木陰に廃材をおき、その上に料理をならべ、それを囲むように5人が座る。いつも冗談をいっている「メキシコ」を中心に、笑いが絶えない。

▽5日目（11月7日）

業者が資材買い出しにいったため、おやすみ。古巷（クーシャン）の町へ。

リンホウの人々

人口：13人、平均年齢：60歳以上

○歩けない人が4人、自由に町まで自転車でいける人は2人。

○その2人は、果樹園（オレンジ・バナナ）・畑（野菜）・養殖場（魚）を世話している

○水くみ（井戸水）・料理・買い出しなどは、助け合って生活している。

○3人はプロパンガスで、それ以外の人は薪で料理している。

許炳遂（70）

「来来来（ライライライ）、雄志（ションチー）！茶！茶！」

親分肌の許さんは西尾さんがお気に入り。毎朝、何杯でもお茶を飲ませてくれる。西尾さんが11日にリンホウに来るのを心待ちにし、カレンダーを見ながら「あと2日で来るな…」とつぶやいていた。

曽繁餘（66）

「幸福」。曽さんがくれるタバコの銘柄だ。2.5元と最も安いそのタバコは、名前とは裏腹に、まずい。彼は酒好きで、普段はシャイだが、酔うとしゃべりまくる。自宅に隣接する発電所で電気の管理をする。

蔡玩郷（69）

玩郷（インチン）は玩銀（インイン）の姉。いつも爆音でラジオを聞いているが、

▽6日目（11月8日）
断熱材設置（長屋Aの屋根へ）

断熱材は、厚さ5㎝ほどの発砲スチロールの板を屋根に敷き詰め、セメントで固めるという簡単なものだが、性能はすばらしい。長屋Aは、「暑い昼間には涼しく、寒い夜はあたたかい」（孫銮盛）という快適なものに変わった。

曾さん（右）の監督のもと、ドア枠を設置

▽7日目（11月9日）
壁塗り（下塗り）

パーティー（P6参照）のため、おやすみ。

▽8日目（11月10日）
屋根の防水加工

（木目の細かいセメントで）

中国の女子大生の日。彼女たちの働きぶりには頭が下がる。

今日は日曜日なので、地元、韓山師範学院の学生が8人―女の子4人、男の子4人―来た。中庭で力強くセメントをこねる、筋肉隆々のデリク君（パン＝シュウカン）につられ、みんなよく働く。

特に女の子がよく動く。セメントでいっぱいになったバケツを両手に持って運ぶ。1度シャベルを掴んだら放さない。よほどうれしいのか、口元はニヤニヤしている。男らは木陰で休んでいることが多かった。

▽9日目（11月11日）
壁塗り（仕上げ）

▽10日目（11月12日）
床塗り、便座・排水パイプ設置、ドアの取り付け

▽11日目（11月13日）
ペンキ塗り（ドア）。トイレ完成

「超気持ちよく流れるー！」

感動して洋式トイレから出てきたのはカオリン。ついにトイレが完成した。足が不自由な人にも使いやすいように洋式と和式（中華式？）の2つがある。また、室内は個室に区切られており、排水口があるので、水浴びもできる。

郭ちんの無骨なヤサシサ

明日（9日）はパーティー。村人や中国人学生といっしょに、ウマイもんを食おう。眞人（藤澤）と私は、プロパンガス・食器100枚などの買い出しで市場へ、陽子（島倉）と泉（松村）は明日の料理の準備をすでに始めている。ハードワーク―バケツリレーでセメントを屋根に上げる―を夕方まで手伝うのは、カオリン（枡田香織）だけ。

「あー、うー」

炎天下、カオリンは汗だく。もうワークなんて嫌い…、と思いはじめたときだ。うめき声を聞きつけた郭ちんが、黙々と手伝ってくれた。

「この日以来、郭ちんとの間に壁がなくなって、仲良くなれた感じがする」（カオリン）。

ボクたちの出る幕はない

中庭でセメントをこねる「棟梁」のシャベルを眞人（藤澤）が奪うと、「棟梁」はジル（3年生の女の子）のを取り上げた。ジルはさびしそうに、手桶でセメントに水を注ぐ役にまわったが、セメントにまみれるシャベルをもの欲しそうに見つめている。それに気づいたのか、眞人がシャベルをジルに渡すと、

「ありがとう！」

今日いちばんの笑顔だ。…もうずいぶん時間がたった。疲れたんじゃないかな。気を利かせたつもりで言った、

「替わろうか？」

「やだ！」

出る幕がない眞人とボクは、セメントまみれになった靴を洗いながら、ガシガシ働く中国人女子大生を遠くから眺めていた。

完成したトイレの前で記念撮影

集合住宅建設計画の値下げ

「コ」の字型の集合住宅をつくる計画は約12万7000元（約190万円）かかると言われていたのだが、マークの通訳で業者と交渉した結果、10万元（約150万円）以下にまで下げることができた。

11万元（約165万円）が限度だという棟梁と、一時険悪なムードになり、ちょうどハマー（徐中茂、韓山師範学院3年）がギターで弾いていた『禁じられた遊び』が妙に切なかったが、何とか値段を下げられた。

勝因は、交渉する日を業者との信頼関係ができるまで延ばし、ワーク開始後8日たった11月10日にしたことにあるだろう。「棟梁」と仲がいい眞人とカオリンが拝み倒すかたちで値下げが実現した。ただし、その条件として部屋を1室減らすよう求められた。くわしい見積りは後日だすという。今後はマークが交渉にあたってくれる。

私たちに気づくとスイッチを切り、下手な中国語や日本語の声にをじっと耳を傾ける。

「再見（チョイキン）、再見（チョイキン）！」

手をブラブラ上下に振りながら、ベッドに座ったまま私たちを見送るその姿と声は、目に焼きついて離れない。

蔡玩銀（68）

玩銀（インイン）のクセは、何か言ったあと必ず「ウッフフ」とかわいい声で笑うこと。姉のインチンの隣に住んでおり、2人は壁越しに大声でおしゃべりする。1度写真を撮らせてもらったが、撮影後はうつむき、しきりに手櫛で髪を梳いていた。有効な治療法がない時代は、顔面や四肢に変形を起こしたハンセン病。女のヒトには特に辛い。

郭联浩（48）

水くみを抜きに、郭さんは語れない。毎朝いっしょに水くみにいったリンホウでいちばんの友達。ふざけて私に帽子をかぶせたり、ティーシャツのよごれを払ってくれたり、突然肩を組んできたり。中国人は概してスキンシップ好きだ。10歳で村にきた彼の父母はすでにない。幼いころ脳膜炎を患い、村人は筆談で彼について「精神不正常」と言う。字が読めず、潮州語しか話せない郭さんの言葉をジル（蔡潔珊）に通訳してもらうと、「家族と他の人々を愛せ。我々は同じ人間だ」と言っていた。「すごく親切な人」（ジル）。

許若深（69）

若深さんは玩郷（インチン）・玩銀（インイン）姉妹と大の仲良し。自室にいるよりも2人のところにいることの方が多い。ハンサム度は郭さんと1、2を争う。

村人との関係

松立（ションリー）は村でいちばんシャイ。郭さんは水くみを愛してる。蘇村長が飼ってるネコの名前は「男（イーナン）」と「一女（イーニー）」そんなことが見えてきたキャンプだった。

毎朝水くみで村人1人1人に会い、飲茶タバコ。ワークの合間に筆談しながら、飲茶タバコ。村人の部屋にぶらっと行くと、やっぱり飲茶タバコ。はじめはお客さん扱いされ、壁を感じたが、いつしか「朋友」と言ってもらえるまでになった。

明るくなった村人

11月11日、途中参加で村に着いた西尾さんは、村人の表情が明るくなっていると感じた。9月に下見で来たときの印象は「（フィリピンで訪れた）スラムー犯罪＝リンホウ」だったが、今はみなニコニコしている。

一方、「隔離」の傷跡は深い。1950年代から始まった中国の隔離政策は、2000年に終わった。村人に残されたものは、差別、孤独、高齢、貧困、そして死だ。

郭さんと水くみ

指がない村人。歩けない人。郭さんは毎朝、彼らに水を運ぶ。天秤棒で水を担ぐ郭さんの背中越しに、村人の生活を垣間見た。

職人芸の水くみ

朝もやが立ち込め、はげ山の緑がかすむ。

「フィーッ、タァーッ」

郭さんが井戸からロープを引っ張り上げると、その先端に結びつけられたバケツに、あふれる水が上がってくる。湧き水はしぶきを立て、足元の右側におかれた一回り大きいバケツにあけられた。まだ冷気が漂うなか、今朝も郭さんの水くみが始まった。目に見える後遺症がなく、村でいちばん若い郭さんは、歩けない村人・指が短くなった人・目の見えない女性など9名に、村に1つだけある井戸から毎朝バケツ2杯ずつ水を運ぶ。

ふたたび、約80㎝下の井戸の水面にブリキのバケツがぶつかる音。小柄な郭さんはバケツ半分の水をくみ、右側のバケツを清水でいっぱいにする。残りは、井戸のそばを流れる小川の土手にぶつけた。毎朝欠かさない郭さんの儀式。その場所は草が生えず、土が削られている。「ヒヒ」振り向いた郭さんは鼻にかかった声で短く笑う。

「フィーッ、タァーッ」

3杯目の水を引き上げる。左側にバケツをおくと、郭さんは、壊れた井戸の手動ポンプに挿し込んであった天秤棒をそっと取り上げ、バケツの持ち手についたロープの先をゆっくりと両端に引っ掛ける。太さが小指くらいのそのナイロン＝ロープは擦り切れそうだ。ヒザを折って天秤棒を左肩に据え「ひっ」と筋肉を刺激し、腰の重心をあげていく。15年間、毎朝水を担いだその肩の筋肉は、グッと盛り上がっている。

ポーズをきめる水くみ中の郭ちん

飲茶タバコ

両側にバナナが植わっている、未舗装の道を北に1分ほど歩くと、小高いところに長屋が立っている。郭さんは水を担いで、淡々と歩いていく。

「ニーハオ、ニーハオ」

許炳遂さん宅だ。その入り口にはエンジ色の帽子をかぶった曽繁餘さんが今日も座っている。無愛想な彼は、黙ってタバコをくれた。その人差し指の第3関節には、1円玉大の生々しい赤い傷がある。後遺症で痛覚が麻痺しているので、傷は治りにくい。

郭さんがバケツの水を水がめにあける間、大柄な許さんは、座り込んでお茶を入れてくれる。もし立つことができたなら、175㎝はあるか。

「喝茶（フーチャー）、茶!!（茶飲んでけー）」

張りのある声で琥珀色の、濃い潮州工夫茶を飲ませてくれる。お猪口でグッと一息に飲み干すと、熱さが身体の芯を通っていくのを感じる。香りはよくないが、いい目覚ましになる。

やさしい蘇さんとシャイなションリー

再び井戸で水をくみ、郭さんは許炳遂さん宅の北側の長屋にまわる。バナナの木の下に薪が積んであるのが見え、その奥には屋根つきのカマドがある。

「ニーハオ、ニーハオ!」

ここはにぎやかだ。住んでいるのは、西側から許若深さん、ションリー、蘇振權さん。ションリーが微笑みながら、何か潮州語で話しかけてくる。指が小さくなった手には、ビニール袋に入った卵。蘇さんが筆談で通訳する。足が不自由で部屋の前に座り込んでいる彼は、タバコの吸殻に水をつ

カンペイちゃん(左)の激しい身振りにあきれるマークと若深さん

リンホウの人々

許松立

松立（ションリー）と言えば、タバコ。常にポワーッとタバコをふかしている。村でいちばんシャイなションリーはいつもキャンパーを遠巻きに見ており、あいさつしても微笑み返すだけだったが、いつの間にか彼の方から、「ニーハオ、ニーハオ」と言ってくれるようになった。

蘇振權（75）

酒好き。晩酌をかかさない。彼と差しで飲んだ酒は、異常にうまかった。肴はパクチー、落花生、豚の丸焼き。めったに食べられない肉を快くわけてくれた。スプライトのペットボトルに入った米焼酎は、500ccで1.8元（約20円）の量り売り。

方紹平（68）

「カンペイちゃん」。間寛平に似ていることからついたこのあだ名を裏切らない、陽気なおじいちゃん。金歯を光らせながら、だみ声でよく笑う。はじめの頃カンペイちゃんは私に手紙をよくくれたが、後半はしきりにカオリン（枡田香織）と文通していた。

劉友南

劉さんからは合計10通の手紙をもらった。遊びにいくと、「紅金」という高そうなタバコをくれる。ビニール袋に入れて机の引き出しにしまってある、秘蔵のタバコだ。室内には観音や鶴の絵、造花が飾ってあり、玄関には色とりどりのお札が貼ってある。香水をつけてくれたり、砂糖入りのお茶を入れてくれたりと、至れり尽せりだった。

けてコンクリートの床に「振權、松立、2人合送」と書き、顔を上げて親切に笑う。2人で飼っている鶏の貴重な卵をわけてくれるというのだ。

中国語方言講座

朝の陽射しがリンホウの緑を照らし始める。郭さんは厚手の服を1枚脱いだ。

長屋A・Bを見下ろす高台にはカンペイちゃん（方紹平）の家がある。墓石を再利用した石段を10段ほど登り切ると、いきなりカンペイちゃんが茶器を持って部屋から飛び出してきた。私たちの到着を待ち構えていたようだ。

「来来、来来…」

水くみの3人―郭さん・眞人（藤澤）・私―に熱いお茶を入れ、タバコをくれる。ここで飲むお茶はいい香りだ。お猪口を飲み干し、わざと「好吃（ホーチャ）！（うまい！）」といってみる。カンペイちゃんは金歯を見せながら声をあげて笑い、期待を裏切らず、「中国語方言講座」をだみ声ではじめる。

陽気な3人組。(左から)若深さん、ションリー、蘇さん

「潮州語（チャオチョウファ）『好吃（ホーチャ）』、広東語（カントンファ）『好吃（ホーセ）』、普通語（プートンファ）『好吃（ハオチー）』…」

毎朝3回は発音練習だ。

村長と筆談

「差別」「孤独」「高齢」「貧困」「死」村長との筆談では、随所にこれら「隔離」による負の遺産が見られた。

貧しさ

60元（約900円）。

村人が毎月自由に使える金額だ。潮州市潮安県の衛生局は生活費として毎月村人1人につき120元（約1800円）を支給する。その中から村人は現金で60元を受け取り、米・野菜などの食費を差し引いた残りを蘇村長に預け、春節（旧正月）・中秋節・清明節の祭りのために積み立てておく。そんな村人にとって、日本人の買い物は信じられない額だ。

11月7日、町で9.8元（約150円）のポケット版の英中辞典を見つけた。その夜、薄暗い電球のあかりの下、年季が入った机に椅子を並べて蘇村長の部屋で筆談した。

村長は小型辞典を指差し、値段をきく。「9.8元」と書く私の手元を上体で覆うようにして見ていた村長は、

「太高！（高い！）」

といいながら椅子にもたれかかり、後遺症で麻痺していない右目を見開き、眉を上に動かす。村長が小数点を見落としたのかと思い、「9元8角」と書きなおしたが、村長は再び高いと言う。

村人にとって無価値で小さな本に、彼らの生活費の約5日分と同じ額をを私はつぎ込んだのだ。ヘビとホロホロ鳥のしゃぶしゃぶに120元（約1800円）を出したことは言い出せなかった。

参考までに中国の物価をあげておくと、ラーメン（ビーフン）1杯が3元（約45円）、青菜各種は500gで1元（約15円）、豚肉100gで0.65元（約9.75円）と、日本のほぼ10分の1だ。

死

村人は「死」を意識して生きている。

蘇村長は次のように書いた。「現在這里現住13人」ここに住む村人は13人だという意味。13人?!下見のときは14人だったはずだ。ふと、9月の下見のときは許炳遂さん宅の隣に住んでいた陳宏広さんが、いつもいないことを思い出す。陳さんの左ヒザから下はすっぽりと包帯に包まれ、全体的に膿みが染み出ていた。私は、「陳宏広？」と手早く書く。紙の上のその文字を読むや否や、村長は後ろにいる方さんと孫さんの方を向き、興奮して何やら話している。「こいつは陳宏広のことを知ってるらしいぞ」私を指差しながら村長はそう言っているようだ。まずいことをきいたかな…。

蘇村長は、「天這人」と斜めに走り書く。天国にいるってことか？私の表情を見て理解できていないことを察すると、村長はつづけて「他死」（死んだ）と斜めに書き加えた。75歳の陳さん自身が老いを感じており、後遺症によって悪化した傷で長い間苦しんだが、もはや医者は無用だった。そう書きつづる村長自身、74歳。方さんや孫さんと話す村長の声は、普段に増してかすれ、しわがれている。

陽子「インチン、水餃子たべてね」
インチン「謝謝、謝謝」

差別

村長は賢い。筆談のとき、中国特有の表現を日本人にわかりやすく書き換えることができる。努力家でもある。家が貧しかったため小学校を3年生でやめ、出稼ぎ労働をするかたわら、独学で読み書きを学んだ。彼ならばその生涯を本にまとめ、多くの人にハンセン病差別を考えてもらうキッカケをつくれる。執筆をすすめてみた。

村長は同意しなかった。中国政府が2000年にハンセン病隔離政策の廃止を宣言したので不要だと言う。しかし、いまだに多くの人がハンセン病快復者を差別し、軽視するという現実についても語った。人々はハンセン病快復者を見ると、冷たく

蘇文秀（74）

村長との筆談の話題は多岐に渡り、村での生活や中国のハンセン病の状況から、恋話にまで及んだ。かなり突っ込んだ話題が多かったので、失礼はなかったかと心配だったが、村長は泉（松村）のノートにこう書いていた：「燎太郎毎天至各地交談生活状況,很好。（燎太郎（原田）は毎日村人を訪ね、生活状況について話し合っている）」

陸裕城

社会復帰した陸さんはハンセン病歴のない女性と結婚し、子供が3人いる（20歳の娘、18歳と15歳の息子）。体の自由がきく陸さんは買い物にいったり、村の果樹園の世話をしており、村の内外に家を持つ。

孫銮盛

親しみを込めて「叔叔（シュウシュウ、おじさんの意）」と呼ばれている孫さんには、ホントによく面倒をみてもらった。毎晩、医院までシャワーを浴びにいくときや、町まで買い出しに行くときに付き添ってくれた。身体に不自由なところがないシュウシュウは、果樹園でオレンジを栽培し、歩けない村人のために町へ買い物に行っている。

陳宏広（75）

亡くなっていた。下見のとき、陳さんの左足のヒザ下はすっぽり包帯に包まれ、膿みが染み出していた。何度もため息をついていた彼は、家族に看取られずに死んでいった。（下見報告の「許宏広」は「陳宏広」でした。訂正します。）

目をそらすそうだ。

やはり、村長の生涯の記録を発表し、ハンセン病差別の実態を知らせることは意味があるのではないか。私のペンがそう書く跡を、村長は目で追う。机においた右手の甲に右頬をぴったりつけながら。その紙を村長に差し出すと、彼は顔を上げ、チラッと私を見、人差し指が短くなった右手で、青いボールペンを器用に動かしていく。達筆だ。

「同じように隔離された我々13人は、山間区にいっしょに住み、自分たちでうまく生活している。左手は不自由になり、1979年には右足を切断した。もう74歳だ。人生ここに至ればもはや意味がない」

日めくりカレンダーの裏に書かれた、美しい青い文字。しかし、その内容は悲しい。左半分が麻痺して動かないその顔のシワは、「隔離」の年月が刻んだものだ。

特別料金をよこせ！

差別の現実を目の当たりにしたこともある。古巷鎮の市場から3輪オートバイのタクシーで村まで帰ってきたときのことだ。運転手は、リンホウ村に着くと「麻風（マーフォン）、麻風（マーフォン）（ハンセン病）」と言いながら、眉間にシワを寄せた顔の前で小刻みに手を振る。彼は、朱佳栄に特別料金を請求し、通常15元（約225円）のところを3元（約45円）多くとった。

蘇文秀村長は、差別の存在を当然のものとして受けとめ、その状況を変えようとはしない。

パーティー

鮮やかなエビの塩ゆで、飴色の豚の角煮、甘いジュース…。普段口にすることが少ない料理を前に、村人は少々興奮気味。11月9日土曜日は、村人と師範学院の学生を招待し、木陰で昼食パーティーを開いた。私たちのことを「頂点に立つ英雄」と呼び、この会は「永遠に記憶にとどまる」（村長）というほど、みな喜んでくれた。

20元の赤い包み

しかし、戸惑いもあった。パーティー終了後にもらった赤い包みには、20元（約300円）が入っていたのだ。また、中国では返礼パーティーを開くのが習慣だが、村人には経済的に不可能なので、そのために苦しませてしまった。村人は非常に義理堅く、礼儀を重んじるのだ。

パーティで語り始めた村長（右）

集合住宅建設に関するアンケート

村人13人全員を対象とし11月16日、集合住宅を新築する計画（＊注ハンダ・医院が作成）の必要性に関するアンケートを、ジルとマークの通訳でおこなった。その結果、ハンダ・医院側のプランを一部変更し、計画を進めることになった。

この調査を行った理由は、約3週間村人の暮らしを見てきたうえでキャンパー同士が話し合いを重ねたところ、ワーク計画についてもう1度村人の意志を確認する必要を感じたことにある。

この聞き取り調査の過程で、ジルとマークは村人の厳しい生活の現実を知った。2人は村人の話に耳を傾け、彼らの必要にかなったワーク計画を立てることができるよう、いっしょに考えてくれた。

（＊注）ハンダ：中国のハンセン病快復者によるハンセン病支援NGO。リンホウ村でのワークキャンプのコーディネータとして協力してくれている。

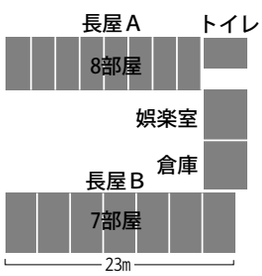
ハンダとリンホウ医院の計画案

（9月作成）

① 現在ある長屋A（8室）はそのまま残す。

② 老朽化した長屋Bを建て替えて7部屋つくり、うち1室を共同台所とする。

③ 倉庫・集会所を新築する。



▲ハンダ・リンホウ医院作成の計画案

アンケートに基づく代替案

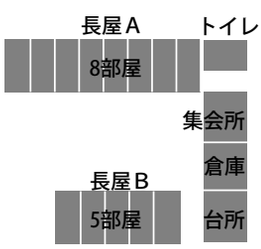
村人へのアンケートの結果、ハンダ・リンホウ医院側の計画のうち、長屋Bと共同台所について一部変更を加えた。

① 長屋Bの個室は5部屋でよい。（村人は13名なので、長屋A（8部屋）と合わせて、必要な個室は13部屋）

② 共同台所として広い部屋を確保する。（各人の嗜好に会わせた料理ができるよう、煙突つきのカマドを複数備える。ハンダ・リンホウ医院の計画では台所が狭い）

ディスカッション

この聴き取り調査に先立つ11月13日22時30分、次回キャンプのワーク内容についての話し合いをもった。3時間半つづいたその議論が直接の引きがねとなり、今回のアンケートを実施するに至った。論点をまとめると、次のとおり。



▲アンケートに基づく計画案

リンホウの人々

村管理会

リンホウ村は、3人のメンバーで構成される「村管理会」によって運営されている。主な仕事は、毎月県の衛生局から支給される、1人120元（約1800円）の生活補助を管理することだ。現金60元と食費を除き、残りは村長が積み立てておき、祭り―春節・中秋節・清明節―に備える。

① 蘇文秀…村管理会の正主管生活員（村長）、生活資金出納員を務め、毎月約50元を医院の事務所から賃金として受け取る。薬局員でもあり、毎月事務所から40元の補助も受け取るという。

② 方紹平…村管理会の副主管生活員。毎月医院から賃金25元を受け取る。

③ 孫銮盛…村管理会の副主管生活員、集団食堂室炊事員、食料購入員。毎月医院からの賃金25元を受け取る。

村管理会の成員への補助金は、村人に支給される毎月の生活補助から差し引いて支払われるという。

キャンパー紹介

マーク（21）

朱佳栄…硬派な学生だったがキャンプで開花し、陽子に「I love you」と言うまでになった。

島倉陽子（24）

顔はお水系だが、その日常は「5時起床、18時退社、18時半大学院（早大）」。

西尾雄志（28）

今年4月から早大ボランティアセンター講師。シラフで語る姿が楽しみ。

1．下見の不十分さ

①下見時のリンホウ滞在は半日と短く、村人の生活の実態を把握できなかった。

②下見でワーク計画を説明したときは、ハンダ・医院の職員・県の衛生局長・FIWC関東委員会の合計十数名で村人を1人ずつ訪問したため、村人は、反対意見を率直に語ることはできなかったのではないかとの懸念がある。

2．新しい住環境への村人の適応

新家屋建設は、村人が長年のうちに確立した生活を壊し、身体の不自由な村人は、新しい住環境に適応できないのではないか。

①家屋は倒壊寸前というほど老朽化してはいないようにみえる。

②1人で2～3部屋を倉庫・鶏小屋として使っているので、新しく建設する部屋では狭いのではないか。

③村人は各自その嗜好に合わせて料理しているので、狭い共同台所（ハンダ・リンホウ医院側の計画）は利用されないのではないか。

村長(左)にワーク計画を説明する中国の学生

④そのため、村人は七輪を使い続けることになる。しかし新しい室内をススで汚すまいと気を遣い、屋外で料理することとなり、雨の日や寒い日に困るのではないか。

⑤水くみを愛する郭さんは水道ができたら失望するのではないか。

⑥共同生活は、人間関係の面で難しいのではないか。

3．妥協線

ワークの必要性に関する調査に時間をかければかける程、新たな問題が見えてくる。しかし、高齢の村人に残された時間は少ない。そこで、この調査を区切りとし、学者や研究者としてではなく、人間として、少数派の意見を抹殺することなく、ワーク実行の是非を判断したい。

調査項目と結果

平均で1人20分以上の時間をかけた。家屋新築完成予定図を渡し、まずジルがプランの全容を説明し、その後、下記の質問事項をきいた。

調査結果

1. 現在の家の危険性	安全 7、危険 6
2. 共同台所	賛成 4、反対 3、条件付賛成 6
3. 鶏小屋	全員反対
4. 倉庫	全員賛成
5. 水道	全員賛成
6. 共同生活	賛成 11、反対 0、条件付賛成 2
7. 計画の部屋の広さ	全員賛成

調査結果の検証

1．家屋の危険性

現在の住居の危険性については、6対7で安全派が多い。ただ、安全派の内訳をみると、計画遂行に問題はない。

①郭さんと曽さんの家は、本人たちは安全だというが、危険だ。

②孫さんと陸さんはすでに長屋Aに住んでいる。また2人は危険な部屋に住む人を気遣い、新家屋建設計画に賛成している。

③蘇さんと許（松）さんは共同の台所がある新しい長屋に住みたいと言っている。

危険派の部屋は、本当に危険だ。「屋根が動いている」という許（炳）さんの家は、ヒサシの傾斜が次第に角度を増している。村でもっとも危険なのは蔡姉妹が住む長屋だ。特に危険なのは壁で、シロアリの被害で室内の四隅にヒビが入っており、それは床から天井―といっても天井は張っていないが―まで走っている。ヒビの幅は平均5㎝、最大7㎝。

2．共同台所

今回の計画の成否を鍵を握っているのはこの共同台所だ。賛成4、反対3、条件つき賛成6人だ。以下は共同台所に関する村人の意見だ。

①狭い共同台所で一遍に料理する案（ハンダ・リンホウ医院）…それぞれ食事の時間帯が違い、嗜好も違うので反対。（蘇文秀・方紹平）

②広い共同台所に複数のカマドをつくる案…煙い。（許炳遂・曽繁餘）

③換気扇をつける案（原田）…維持費がかかる。

④各自が七輪で料理する案…部屋がススで汚れる。新集合住宅では、現在のように台所と生活空間を分けるだけの部屋数もない。（許炳遂）

⑤部屋を汚さないために屋外に七輪をおく案…雨の日や寒い日に困る。（許炳遂）

⑥部屋を汚さないために共同の台所に七輪をおく案…同時に皆が使うと煙い。

⑦各自が自室でガスを使う案…ガスの維持管理ができない。（許炳遂・許若深・蔡玩郷・蔡玩銀）

⑧現在ガスを使っているのでどちらでもいい（劉友南・陸裕城・孫奎盛）

⑨特に異存はない（許松立・蘇振權・郭联浩）

これらの諸事情を考慮に入れ、藤澤が考え出した案は、「煙突つきのカマドを共同台所にたくさんつくる」というものだ。現在、朱佳栄がいくつの煙突つきカマドが必要かを調査している。

3．鶏小屋

13人全員が鶏小屋はいらないという。屋外で飼うか、現在の村長宅を利用するという。

建設業者紹介

藤澤眞人（24）
ベテランキャンパー眞人。頼れる兄貴はFIWC関東次期委員長。

枡田香織（21）
法政大4年。独特なゆったりとした喋り方で村人やキャンパーを和ませる。

松村泉（29）
調理師免許を持つサーファー。料理への執念は凄まじく、餃子は皮から。

棟梁
蘇壮祥…「潮安県古巷鎮建築公司」の社長。

メキシコ
蘇錫栄…中南米風の帽子をかぶっていることから名づけられた。

童顔
姓名不詳。童顔だから、「童顔」。

リーダー
姓名不詳。あくまでキャンパーの「リーダー」であって、業者4人の中では下っ端。「棟梁」にタバコを投げ与えられる。

4．倉庫、5．水道

倉庫・水道については全員の賛成を得ることができた。水道を建設する上で問題だったのは、郭さんから「水くみ」という愛する仕事を奪うことだが、郭さんは水道建設に賛成してくれた。

6．共同生活

村人13人全員が1ヶ所に集まって暮らすことに賛成を得られた。村人の声を紹介する。

・村長：「時には対立することもあるだろう。ぶつかり合いがない方がおかしい。しかし、それよりも重要なことは互いに助け合うことだ。特別な性格をもった人もおり、はじめから全員が新しい長屋に引っ越してくるのは難しいかもしれない。引っ越したくない人もいる。しかし、いずれは皆がともに暮らせるだろう」

・曽繁餘：「村人が集まって暮らすのは大事だ。ただ、私は静かに1人で暮らす。酒好きなので、騒いでみんなに迷惑をかけるのがおちだから。発電機を動かすにもここが便利だし。寂しくないかって？心配しすぎだ」

・許炳遂：「他の村人の意見を尊重する」

・蘇振權：「心配いらない。助け合うことができるので、今よりも生活は楽に、便利になるだろう。確かに生活は劇的に変化するだろうが、平気だ」

・郭联浩：「問題ない。みんな協力して一緒に住むべきだ」

・蔡玩銀：「問題ない。引越しを手伝ってくれさえすれば」

・劉友南：「心配していない」

7．部屋の大きさ

部屋の大きさは長屋Aと同じ（5畳ほど）で構わないと全員が言っている。

8．質問・心配な点

・郭联浩：「いまの古い家を壊さないでくれ。ものがたくさん置いてあるから」

・蘇文秀、方紹平：「長屋Bの5部屋の真ん中に集会所をつくれば、皆が来やすい」

・孫銮盛・陸裕城：集会所にあるテレビを夜遅くまで見たいので、集会所は村人の部屋から離れた場所に建ててほしい。

※集会所の建設場所については、現在マークが村人と話し合っている。

「いい子だよ、ジルは！」（陽子）

ジルがしゃがみ込んだ。目線を許さんと同じ高さにし、アンケートを進める。許さんは足が不自由で座り込んでいるからだ。

ジルは終始丁寧に、熱心に説明をする。村人は、村の外の人と話す機会がないので、ジルやマークに話したいことがたくさんある。曽さんとは1時間半も話したが、いやな顔ひとつしなかった。

村長宅での説明が終わったとき、私はジルに通訳のお礼を言った。

「当然よ」

ジルは微笑みながら軽く言う。

現在彼女は、所属しているボランティア団体が村で活動する可能性を探っている。

中国的学生

地元・潮州にある韓山師範学院の学生10人が、ワークキャンプに参加した。「ハンセン病快復者」としての村人にはじめは戸惑っていたが、水くみやワーク、パーティー、集合住宅建設計画の必要性に関するアンケートをするうち、「また村人に会いたい」と語るまでになった。当初心配された言葉の壁は、彼らの通訳によって低くなった。彼らの参加なしに、今回のキャンプは語れない。

11月は授業期間中なので、中国側キャンパーは週末を中心に参加した。唯一平日も参加したのは、マーク。11月1～6日の休みを利用し、中国側の中心となってくれた。また、ジルはアンケートの日、たった1人で村に来てくれ、前日から村にいたマークとともに調査の成功を助けてくれた。

「中国人はボランティア精神に欠ける」というウワサを聞いていたが、そんなことは感じさせない学生たちだった。おどろいたのは、餃子を村人に配ることを自分たちで計画し、実行したことだ。13人全員の部屋を訪ね歩き、最後は村長にきちんとあいさつして帰っていった。ウワサは、ウワサでしかない。

マーク@ハーレム

マークも水くみ

リンホウでのはじめての朝。郭さんの水くみについていくことになった。戸惑うマークを半ば強引に誘った。

あんた、潮州人か!?

はじめは許さん宅。

「ニーハオ、ニーハオ！」

へたくそな発音で私があいさつする。9月に来た日本人か、よく来たな、という顔で許さんが返す。

「ルーホウ」

潮州語でマークがオハヨウを言うと、許さんはマークの顔を見直した。あんた潮州の人間なのか?!学生かい、どこに住んでるんだ、家族と一緒か、年齢はいくつだ。笑い声も聞かれる。

マークの通訳

郭さんは水を担いで、蘇さんが住む長屋にいく。そこには、下見のとき名前をききそびれた人がいた。名は、許松立。マークの通訳があると助かる。

少々こわばった笑顔のマークと話す2人は満面の笑みで、来てくれてありがとうと言う。

偏見が消え始めた

「ホントに丁寧で、話していて心地よく、村の外の人より親切だった。人を気遣う方法を知っているみたいだ」

マークははじめて「ハンセン病快復者」と話した感想をこう語った。彼らが何十年も隔離されてきた事実を伝えると、

「わかってる」

とマークはうつむき加減に横を向き、何度もうなずいていた。

曽さんには1時間半もワークの説明をした

再見、リンホウ

11月17日、リンホウを去る日。昨日の雨が嘘のように、空が青くさえ渡る。初日の水くみ以来、マークはすっかり村人と打ち解けているが、まだ握手をしたことはない。中国人はスキンシップが大好きなのだが。

村人との別れ

8時すぎ、村人1人1人に別れをつげてまわる。静かにお茶をいれ続ける許さんから、いつもの威勢は消えている。合計で6杯飲んだ。

蘇さんがくれた紙片にはこうあった：「緒位日本朋友你們好身体健康、祝你們一路平安。敬礼再見」握手し、消えそうな声で、「再見」

蘇さんに聞こえただろうか。

インチンとマーク

歩ける村人はすべて中庭に集まっていた。あとは、足が不自由なインイン・インチン姉妹のところだ。

ちょっとおつかれの中国の学生たち。お茶をどうぞ

蘇さんにバナナをもらい、喜ぶカオリン

「ハア、ハア、ハア、ハア…」

薄光が射し込む部屋で、インチンは薄い布団をかぶり、うつぶせに横になっていた。まさに虫の息。昨日も寝ていたが、そうか、具合が悪かったからか。インチンが搾り出す言葉を、入り口にたたずむマークが通訳する。帰路の安全を祈る言葉だ。

時々、苦しそうに息が高くなる。インチンは、彼女の手をさすっている陽子に、おまえさんは親切だね、と泣く。インチンの涙を拭く泉。私はいたたまれなくなり、外に出て座り込み、泣いた。「隔離」が憎い。郭さんは私の肩に腕をおき、

「インチンは姉のような存在だ。みんな死んでいく…」

と涙を流し、声をあげて泣いた。

マークはしゃがみこんで郭さんの肩を抱き、うつむく。再びインチンの声がする。

「私のことは心配しないで、幸せに日本に帰りなさい。謝謝、多謝…」

マークは彼女の部屋に入り、しゃがみこんでインチンを見た。陽子はひざまずいてインチンの手をさすりつづけている。と、マークは、木のベッドに近づき、指が小さくなったインチンの手を両手で包み込んだ。しばらく動かないマークとインチン。

「謝謝、多謝」

インチンはそう繰り返す。

＊

「これがハンセン病を病んだ人の最期だ」

中庭に戻りながら言うと、マークは横を向いて目を落とし、2度3度うなずいた。

医者を連れて行くよ

9時、潮州市のバスターミナルに向かうバスを医院で待つ。院長は私の目を指差し、泣いただろとからかう。黄行政組長はいつもの笑顔。

医院の職員の不作為を憎むのは簡単だ。しかし、それでは何も変わらない。黄行政組長がインチンを見舞うように、マークを通して頼んでみた。医院でいちばん若い彼に変わってほしい。笑顔で同意してくれた行政組長と握手した。

マークからのメール（2002年12月1日）によると、行政組長は医者を伴いインチンを見舞った。現在、彼女の病状は快方に向かっている。

「はちみつ、チョコレート、コンデンスミルク…」

中国キャンプ 反省会

2002年11月23日、藤澤眞人宅にて

もっと村人と仲良く！

島倉陽子「足の不自由な村人の所にも、もっといきたかったな」

原田燎太郎「食事当番をローテーションにすれば、陽子や泉も村人のところにいけたかもね」

藤澤眞人「でも、インインとインチンのところに行くと必ず若深さんがいて、お邪魔かなと思って足が遠のいたな」

島倉「いや、来てくれたらうれしいよ。それにしても、うちら風呂行き過ぎたよね。時間がもったいなかった。あと、毎日ミーティングすればよかったね。酒飲む前に5分か10分でもいいから。それに、朝ごはんが遅かった。業者が来たときに皿洗いしてるようじゃダメだよ」

藤澤「時間を決めて動いたほうがよかったね。ナーナーで時間が動いちゃった。少人数だからこそうまくいったんだと思う。まあ、こうゆうキャンプもありだね。でも、人数が少ないから、ワークさぼって村人のとこへ遊びに行きづらかったな」

島倉「『余暇にみんなでこれをやろう』ってのを決めても良かったと思う。女の村人のところに行って体を拭いてあげるとか。せっかくバスタオルたくさん持ってきたのに、一回も使わなかった」

原田「おれと眞人だけ郭ちんの水くみについて行ってたから、申し訳ないなと思った。最後は郭ちんが迎えにきてくれるまでになったからね」

冷蔵庫、買う？

枡田香織「一回だけすごく辛い日があった。みんながパーティー準備で私がひとりでワークやった日。そのときは郭ちんが手伝ってくれたことで救われたな」

原田「1500元の冷蔵庫を買って、2日分の買出しができれば、パーティの準備も楽になるんじゃないかな」

枡田「ビール冷やしたいんでしょ!?村人は月120元で生活してるのに…」

原田「月120元の暮しを1日くらいやってみるといいかもね。村人の壊れそうな長屋に泊まるとか」

藤澤「村人に迷惑かも。キャンパーが散らばるのもよくないと思う」

原田「長屋Aの2部屋を宿泊用に借り切ったのも問題だったかな。テレビのある部屋だったから、村人がテレビを見れなくなったし」

島倉「でも、医院に泊まってたら村人といい関係をつくれなかったよ。そういえば、リンホウを離れるとき、食器を長屋Aの1室じゃなくて倉庫に置かせてもらえばよかったね」

少人数キャンプの是非

原田「反省点をまとめると、おれはやっぱり食事当番だと思うな。食事をいつもつくってれた陽子と泉が村人のところにいけなかった。人数が少なかったからな…」

枡田「でも、少人数だからよかったこともあるよ。ワークしてるとき、自分が必要とされてる実感が持てた。ワークと人数が釣り合わないとつらい」

（ヒゲを五厘に刈り込んだ西尾雄志、登場。）

藤澤「ワークリーダーの力量の問題でもあるね。いかに仕事を割り振り、仕事を創出するか」

原田「割り振る？やりたければ自分から『やりたいから替わって』っていえばいんじゃないの？」

藤澤・枡田「それは違うよ。言えない人は言えないんだって」

島倉「今度は中国語の勉強会をしてから行こうよ」

原田「雄志（ションチー）の反省点はどころで何？」

西尾雄志「最初からキャンプに参加しなかったこと」

棟梁モテモテ

中国キャンプ 対談

2002年12月1日、茂木亮宅にて

全然、違和感ない

西尾「今日は中国キャンプの対談ということで、原田、茂木、島倉、西尾の4名が集まりました。では、終電が近い島倉さんから質問したいと思います（まだ、6時前ですが…）。島倉さんは、今回のキャンプで初めてハンセンの問題と向かい合うことになったと思うのですが、これに関して何か感じることがありましたら教えてください」

島倉「今年の2月のヤンカン報告集を読んで行ったんですが、これには原田君が始めてハンセン病の村人に会って、その指がなかったり、足がなかったりする姿にギョッとしたと書いてあったので、私もかなり緊張していたのですが、いざ対面して話をすると、全然違和感なく普通の仲間として接することができたのが、結構驚きでした」

ハンセン病のことは忘れてる

西尾「そうですね。僕自身もこのキャンプでのキャンパーと村人との関係は、そのほかの国でやるキャンプの村人との関係と同じように、きわめて自然な関係だったように思います。この点に関して、今回二度目の中国キャンプ参加の原田君はどう感じましたか」

原田「今回は不思議なくらい普通に村人と友達になれたので、僕自身おどろいています。言葉はおかしいかもしれませんが、『慣れ』ですかね。後遺症がある体をみてびっくりしない方がおかしいと思うんです。でも、壁をつくってしまったら、そこで終わり。あえて近づいていく。そうすると、いつの間にかハンセン病とかそんなことは忘れてる」

ワークキャンプとハンセン病

西尾「ハンセン病という病気は、ほかの病気に比べて特異な面がありますよね。普通の病気だったら病気が治ったらそれでおしまい。治ったらもうその病気のことなんて考えなくなるんだけど、ハンセン病の場合、外傷が出やすいですからね。病気自体が治った後も、壁ができてしまって、それがハンセン病の差別や偏見が生まれる土壌となった。そういったハンセンの問題、つまり差別と偏見を考えるにあたって、今回のワークキャンプで私たちと村人との間で生まれた関係というのは、非常に示唆に富むもののように思うんですね」

原田「『偏見は消えないけど、薄まる』とかそういうことかな。あ、でも、2月のヤンカンでは『薄まる』だったけど、今回はそれ以上に友達になったなあ」

島倉「私はショック療法みたいに、『偏見は薄まる』ではなくて、一気に消えていったけど…」

原田「陽子（島倉）の言う『偏見』って何？」

島倉「だから後遺症の残った体を見たり、その人と握手をしたりして、うつるんじゃないかと後で心配したり、それでハンセン病の人も快復者の人も自分とは違う区切りの人間として分類してしまうことかしら」

原田「それが一気に消えんの？誤解を恐れずに言うと、おれの場合、決して消えはしないけどな…。村人と友達になったよ、でも、ふと彼らの傷をグロイなと思うことはある。それでも、友達。『うっ』と思ったときに拒絶するか、しないかなんじゃないのかな」

（松長麻美ちゃん（韓国のハンセン病定着村でのキャンプのリーダー）登場。）

「ハンセン病快復者」と「おたふく快復者」

西尾「この話に直接つながるかどうかは分からないけど、このキャンプの良かった点は、村人と付き合う中で、ハンセン病という問題が前面に出なかったってことだと思います。そもそも彼らは菌陰性だから、要するに治ってるんですよね。だから彼らと関係を結ぶにあたって、ハンセン病というのは本来前面に出てくるものではないはずだと思うんです。『ハンセン病快復者』という言葉には、『おたふく快復者』という言葉と同じような滑稽さがあると思うんですよね。そんなことよりこのキャンプでは、例えば郭さんはまじめに毎日水汲みする人だけど、チャーミングな一面もあるとか、村長の蘇さんは結構アタマのいい人で、責任感もあるとか、そういった面がいろいろ見えてきて、そこから僕たちのとの関係が生まれた。それが大事だと思うんです。おたふく同様、ハンセン病も彼らが過去に病んだ一個の病なわけだから、本来、治ったらどうでもいいことに過ぎないはずなんです。人間付きあいするなかで、前面に出てくるべき問題ではない。まずはとりあえず彼らがハンセン病快復者だという問題はどうでもいいはずなんです」

原田「そう、どうでもいいはずなんです。でも、おれは『うっ』と思っちゃうんです。そう思う人が多くて、その人たちが『拒絶』したからこそ、ハンセン病問題があるんじゃないんですかね」

チャラチャラした女の子が目覚めた

島倉「そうね。でも原田君は、キャンプで『拒絶』ではなく、『受け入れる』ことを覚えた。私も、以前はテレビや本でハンセン病の問題に触れていただけで、結構私の中には結構その人たちに対する偏見や差別があったけど、今回のキャンプで初めて生のハンセン病快復者の人たちに会って、全く偏見が無くなった。私みたいなチャラチャラしたそこらへんのかわいい女の子が目覚めたっていう事実だけでも、キャンプを開催する意味は大いにあると思うよ。あ、つーか私、終電が、じゃなくて終バスがヤバイので帰る！！！再見！」

原田「おれもそう思う。キャンプがなかったら知れなかったことだ。ねえ、もぐちゃん（茂木）？」

ハンセン病は関係ない

茂木「そうだね。参加した人や村の周りに住んでいる人たちが、『うっ』っと思っても『拒絶』でなく『共存』していく気持ちを持つことができ、それが広がっていくことが、ワークキャンプという地道な活動の望んでいることのひとつじゃないかな。僕もリンホウへ下見で行ったけど、村人の傷を見てちょっとびっくりした、悲惨だなと思った。でも原田君の言う『受け入れる』とか、そうでないかとかは何も考えず接していると思う。私とあなた、そこにハンセン病だからということは関係ないよ。韓国の定着村に行った麻美ちゃんはどうよ?」

松長「いまの話を通して、人間づきあいの中でハンセン病云々っていうのって、ああそうだなぁって思った。確かに、よくよく考えてみると村の人たちと話をしてる時っていうのは、やっぱりこの人がハンセン病だったから…ってことは意識してない気がする。なんだけど、実際はそういう風に接していながら、ふとしたときに『そういえばこの人は…』って思ってしまうこともあったり、そこに辛い経験とか、しかもそれは自分が勝手に想像している内容のもので、それを重ねて見てしまったりする瞬間があって、それって本人にとってはあまり喜ばしいことじゃないと思う。ただ、そういう話とは別に、やっぱり快復者の人たちの経験っていうのは貴重なものだと思う。どんな人でもその人の経験って言うのは貴重なものなんだけど、でもそこにハンセン病問題が絡んでいるっていう部分で、それについて考えていく上ですごく貴重。でも、そういう部分から関係性をつくるんではなくて、まずは『はじめまして、こんにちは』からっていうのが理想かな。そうして信頼関係とかできたうえで、話を聞かせてもらえたりすればそれはそれで儲けもんだし。そうそう、今回の韓国キャンプでは、参加者が『普通に話せて、知り合いになれた』って言ってたのがすごくうれしかったなぁ。そんなわけで、チャリで家まで宿題やりに帰るっ!」

ハンセン病への「慣れ」

西尾「このキャンプで人と接する中で、とりあえずその人が元患者であることをカッコにいれる。だけどほんとにカッコにいれらるのか。外傷があるじゃないか?人によっては見た目もだいぶ違うじゃないか。そこに『うっ』と思ってしまうことがあることは否定できないだろう。それが燎太郎の意見だよね。そしてそれも燎太郎の言うとおり、慣れが解決してくれる。バングラキャンプでダール豆のカレー見て『うっ』と思う人も、だんだん慣れてうまく感じるようになる。だけどその一方で、どうしてもダール豆のカレーになじめなくて、キャンプ中ずっとビスケットかじってるキャンパーもいるんだよね。彼らはどんどんやせていくんだけど…。まあ、これは食の趣味の問題だから、なじめなくて食えなくてもたいした問題じゃない。ダイエットにもなるしね。だけどハンセンの場合は、慣れてもらわないと困る、って言う事情があるんだよね。拒絶か適応か、その人しだい、ってことでは片付かないんだよね」

原田「そうだよね。こういった問題ってハンセンに限らないと思う。外国人労働者の問題、宗教上の対立。そういった問題の当事者になったときも、ハンセン病関係のワークキャンプでの経験があれば、あからさまに憎しみあうことはないと思う」

キャンパーと村の外の人との関わり

茂木「でも、実際ワークキャンプに関わっている人って、ごく一部だよね。参加する人だけじゃなくて、たとえば中国の村だったらその地域のまわりの人たちにも理解を得られる活動になればいいね。そのためにも、今回みたいに地元の学生や業者の人たちと一緒になってやったことは、すごく良い方向に進んでいくんじゃないかな。そういう地域の人たちの声も聞いてみたいな。何か知ってる?」

原田「リンホウから山道を自転車で20分いったところに小さな町があるんだけど、そこにある小さな店のオヤジさんと筆談したとき、その人は『ハンセン病の村ってトイレないのかぁ。おまえさんはそこにトイレつくってんのかぁ』ってやたら感心してた。そういうウワサってだんだん広まっていくよ、きっと。『最近かわいいジップンガン（日本人）の女の子2人組みが市場にくるけど、ハンセン病の村に滞在してるらしいぜ』ってな感じで。業者の人やキャンプに来た学生だって今回のことを話のネタにすると思うし。こういった小さなことから差別・偏見は薄まっていくよ」

隔離村を社会に開く

西尾「そうだね。リンホーのキャンプがそんな感じになっていくといいね。ワークキャンプってセコイ金のプロジェクトしかできないけど、キャンプ地を周りに開いていく力があるよね。ヤンカンでもキャンプをすることでだんだん子供たちが村に来るようになった。ガイジンの物珍しさでね。そしてキャンパーの誰かがその子供と遊んであげると、今度はその子供が次の日、友達を呼んでやってくる。そうこうしているうちに、今度は親が心配して様子を見にくる。そして僕たちの活動を説明すると、意外に共感してくるんだよね。シャワールームにしても、トイレにしても、金さえ積めば何でもできるけど、村を周りに開いていくってことは金を積んでもできないんだよね。それをする力がワークキャンプにはあると思う。村に貢献できることをしたいと思ったとき、『何をつくるか』ってことが大切であると同時に、『どうやってつくるか』ってことも大切なんだよね。トイレ作るにしても金だけ積んで、業者だけ雇って仕事しておしまいってな活動だと、物的な意味での村人の生活環境の向上には役立つけれども、差別や偏見といった問題に対しては、そういうやり方では無力なんだよね」

原田「そういう意味で今回の最大の収穫は、中国人学生の参加だよね。今回のキャンプでは村人と中国人学生が笑いながら話してるのを普通によくみたけど、これって実は画期的なことだよね。しかも彼らはうちら日本側キャンパーが帰った後も村にくるっていってくれた。これってちょっと前までは考えられなかったことだよ」

「正義感への陶酔」の危険

西尾「ちょっとお互い酒が回ってきて、論調が自画自賛的になってきたね。それにし

トイレで懺悔するカオリン

ても剣菱うまいな…。酒で思い出したけど、僕らが今取り組んでいるハンセンの問題って、日本では本もたくさん出ていて、議論も出尽くしてるって感があるよね。その中で僕たちが注意したい落とし穴として『正義感』への陶酔があると思うんだよね。光田健輔だとか小笠原登だとか、もう死んでしまった人たちを持ち出して、善玉悪玉で論じるのって、もはや意味がないと思うんだよね。確かに歴史の検証としては意味があるんだろうけど、僕たちが首を突っ込む問題じゃない、って気がする」

原田「なんで？」

西尾「歴史の検証自体は大切な仕事だと思うんだよね。だけどそれは歴史学者とか専門家の仕事で、一般大衆の僕らがやることではないと思うんだ。好きな人はやればいいんだけど、そこにある落とし穴は、『あいつが悪かった』って歴史上のある人を、『今』という特権的な立場に立って断罪して、正義感に酔ってしまうことだと思う。正義感の看板を背負うと、人間って人の意見に耳を貸さなくなるでしょ。耳を貸さないだけならいいけど、自分の正義感と相反する人間を、悪玉として叩き潰してしまうんだよね。それっていわゆる光田健輔が陥った落とし穴と一緒だと思うんだ」

作業中の棟梁としゃべりまくる村人の曽さん（中央奥）

原田「なるほど。すべての人が1つの正義のもとに集まることって無理だしね。じゃさ、雄志（ションチー）はどういう視点からハンセン病問題に取り組みたい？正義感に陶酔せずに」

無能さが役に立つ

西尾「正義感の自己陶酔に足をすくわれない一つの処方箋は、人の意見に耳を傾けることだと思うんだよね。自分がやってることをあんまり過信しないで、常に『これでいいのかな』って自分を問い直すことが大切だと思うんだ。それで村の人に相談する。詳しい人に相談する。人の意見をきちんと聴く丁寧さが必要だと思うんだ。その点、今までワークキャンプをいろんな国でやってきて、良かったと思うのは、自分たちの能力の限界を身にしみて分かってきたことかな。誰かに助けてもらわないとキャンプってできないもの。だから、何かにつけ人に相談する。『どうしよう』ってね。それはある意味情けないことなんだけど、好意的に解釈するなら、そこで人との協力関係が生まれる。『俺が正しい。俺がお前たちを幸せにしてやる。俺について来い！』ってな感じで独善的に活動を進めてしまわないための処方箋として、僕たちワークキャンプ集団の無能さが役に立ってる！『お前らを幸せにしてやる！』ってそんな力、そもそも僕らにないもの…」

ワークが一人歩きする危険

原田「そうだね。その点、また自画自賛的だけど、今回よかったのは、村に「コ」の字型の集合住宅をつくるワークの必要性に関して村人全員にアンケート調査をしたことだよね。そのきっかけはカオリン（枡田香織）が出した、建設計画への反対意見だった。カオリンは村人の生活を3週間近く見てきて、このワーク計画によって生活環境は激変し、身体が不自由で高齢な村人はそれに適応できないのではないかという疑問をもった。おれとしてはワーク計画を実行したいから、カオリンの反対意見を黙殺するのは簡単だったけど、ワークは村人のためにやるんだもんね。実際、おれも村で生活してみて、ワークの必要性に疑問をもってたしね。結局、調査したら必要だってことを再確認できたからよかった。気をつけないと、村人のためにやってたはずのワークが、いつの間にかひとり歩きしはじめる危険があるね」（つづく）

中国ワークキャンプ参加者募集

2003年8月（予定）

メインワーク：集会所、台所建設（予定）
参加費：約11万円
定員：FIWC 10名＋中国キャンパー 10名

2002年11月	トイレ建設キャンプ
2003年2～3月	集合住宅建設キャンプ
2003年8月	集会所、台所建設キャンプ

ニンゲンノキズナ

家族の絆の回復―ハンセン病への差別・偏見がそれを妨げている。

蘇村長と筆談では、家族の話題が多い。「おまえさんの家族は何人だ」「結婚はしてるのか」「家族と仲良く暮らせよ」…。

村長は11歳のとき、小学校をやめて出稼ぎ労働をはじめた。やがてハンセン病を病み、家族から引き離される。ハンセン病差別による隔離だ。村長は、家族を失った。

一方、リンホウに住む陸裕城さん（66）は、若いころ社会復帰した。後遺症がほとんどない彼は、村外に家族を持つ―ハンセン病歴のない妻、20歳の娘、18歳と15歳の息子。

「裕城には奥さんがいるんだ」。

そう言いながら村長は、複雑な笑顔を見せた。家族がある陸さんへの冷やかし、祝福、そして羨望の気持ち。

リンホウの人たちが気兼ねなく家族に会える雰囲気を、中国につくっていきたい。

ワークキャンプは、隔離村に人の流れを生む。中国・日本の学生、建設業者が11月、村を訪れた。2003年1月には、中国の学生がリンホウで旧正月を祝った。2月には、再び日中の学生がリンホウに住み込む。そこでは「ハンセン病」という病は、特別な意味を持たない。

リンホウの隔離状態は解けつつある。リンホウへの人の流れが大きくなれば、リンホウの人たちが家族に会える日も近い。

中国ワークキャンプ報告
2002年11月

2003年2月10日発行
2003年3月19日第3版発行

フレンズ国際労働キャンプ（FIWC）
関東委員会
委員長西尾雄志

執筆：原田燎太郎（茂木新聞社）
編集：茂木亮（茂木新聞社）

中国リンホウ村ワークキャンプ

報告会
2003年
3月22日（土）
15:00～
会場：早稲田大学
（詳細はモグネットに掲載）

カンパのお願い
郵便振替口座：
00170-2-565117
加入者名：
FIWC関東委員会

モグネット
www.mognet.org
モグネットでは中国リンホウ村ワークキャンプの情報がさらにもりだくさん！！
http://www.mognet.org/